

「男性の役割」

～あなたは神様の力がある～

ルカ 15 : 11 - 32

今日は父の日です…

自分の本来の姿がちゃんと保たれているのかどうか、本来の父を実践することができているかを感謝されることを通してもう一度見る日でもあります。今日は、男性は自らの責任を果たして男として生きているか、女性は男性との向き合い方が間違っていないかを感じ取りましょう。

父親はそこで自らが生きてきた生き方を示すということが生き様であり、責任です。

「…わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、私を愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」(出エジプト19:5-6)と聖書は語っています。私たちの生き方は確実に三代まではいきません。ですから、私たちは生き方を考えなくてはなりません。

創世の時代に男性はちりから造られ、女性は男性のあばら骨から造られました。あばら骨は外からの大きな衝撃から内臓を守る役割をしています。神様は女性を男性の弱いところを支える力ある支え手として造られました。男性は志を立て、成し遂げることが役割ですが、成し遂げる力が弱いのです。その弱さを支えるのが女性の役割です。

放蕩息子のたとえ…

二人の息子がいて、弟は出来損ないです。その弟が父に「財産の半分をください。」と言いました。すると、父は兄と弟二人に財産を分けてやりました。弟は家を出て湯水のように財産を使い果たしてしまいました。友達もお金目当てだったのでみんな離れていきました。何もかも失った弟はとうとう豚の世話をしていた時に、豚の食べるいんご豆を食べたいほどになっていました。その時、弟は我にかえり、父のもとに帰って使用人の一人として働かせてもらおうと決断し、家に帰りました。

このたとえから父なる神様が何を教えたいのかを見てください。なぜ母は登場しないのでしょうか？母はいつも子どものことを思い、慰めようとします。母が登場したら、息子が財産をもって出ていく前に心配して何とか出て行かないように食い止めたのではないのでしょうか。それではこの話は終わってしまいます。父は息子を一人で行かさなければならなかったのです。それは自分が死んだ後、息子が自立をし、自分の力で生きることができるようにすることが父親の責任だからです。だから父は信じて送り出したのです。父は子どもに手取り足取りしてあげることが仕事ではありません。自分が何をしたら子どもの自立のために良いかを考えることが仕事です。

次に息子(弟)にスポットをあててみましょう。彼はいんご豆を食べる段階でやっと自分の無力さと自分の犯してしまった大失敗に気づきました。そして、その時に「謝ろう!!」と思ったのです。最大の責任の取り方は、謝って、その後どうやってその代価を払うかです。彼は子としてではなく僕として父の家に帰りました。なくした財産を何とかして自分の体で返そうとしたのです。神様はこのたとえを通して「自立と責任感の回復」と「成し遂げる力」が与えられることを私達に教えておられま

す。家に帰った弟は僕としてではなく、息子として迎えられるました。くつを履かせてもらい、指輪をはめてもらい、着物を着せてもらいました。くつとは荒地で歩いていくための力です。指輪とはエジプトの時代からイスラエルの時代を見ていくと長子の権利です。すなわちその人の使命です。そして、着物は裸の恥が見えないためです。

①成し遂げる力を壊すものとは「めんどう」と「逃げ」

父親は、子ども達に自立させていかせなければならないという思いがあれば必要な行動をもってやり始めます。男性がこの責任感を回復したらそれができるのです。どんなことも逃げずに戦えば必ず結果があります。そして、その結果はうまくいくのです。

②成し遂げる力を壊すものとは「恐れ」

「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです。すべてのことを、つぶやかず、疑わずに行いなさい。」(ピリピ 2:13-14)

志を立てさせるのも実現されるのも神様です。私達ではありません。その力と与えられるのが私達です。だから、逃げずに向き合っていれば必ず成し遂げられます。成し遂げる力を壊すもの「恐れ」を捨てましょう。

③成し遂げる力を壊すものとは「甘え」「依存」

これが最後の敵です。誰かが何とかしてくれる病です。私達の模範はイエス様の生き方です。自ら十字架を背負い、多くの人々の罪を贖うためにムチ打たれながら歩んで行ったその生き方が私達の生き方です。私達の痛みはイエス様が全部背負ってくださったのですから、今度は私達が愛する人のものを背負っていくのです。イエス様は私達が背負おうとしているその隣人の重荷と一緒に背負うと言ってくれています。だからその重荷も重荷とはならないのです。

男性と女性が共にいるから実を結べる…

聖書は私達に「こうあるべきだ」という正しいことを伝えていますが、それを知っていることが大きな力なのです。自分のルールや方法ではなく、恐れて逃げる気持ちに負けずに生きようとする決断ができるのです。男性は、この聖書が語っている「主の教え」を喜びとし、昼も夜もその教えを口ずさみ、愛する家族やかかわる人達に伝える責任が与えられています。また、「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。…」(創世記 1:28)と言われたのも男性です。その男性を支えよと言われたのが女性です。与えられた祈りと出産できるほどの強い力によって男性の脇にいてその弱いところを支えて共に生きるのです。だから女性も使命をもっていなければなりません。男性のもった責任と女性の与えられた強いアイデンティティが合わさって物事が初めて完成されるのです。男性だけでも女性だけでも完成されません。それが神様が与えた子どもを生み出す方法です。男性と女性が共にいるから実を結ぶことができるのです。

(要約者:全本 みどり)